

学部・研究科等の現況調査表

教 育

平成28年6月

滋賀医科大学

目 次

1. 医学部	1-1
2. 大学院医学系研究科	2-1

1. 医学部

I	医学部の教育目的と特徴	1 - 2
II	「教育の水準」の分析・判定	1 - 3
	分析項目 I 教育活動の状況	1 - 3
	分析項目 II 教育成果の状況	1 - 8
III	「質の向上度」の分析	1 - 12

I 医学部の教育目的と特徴

1. 目的

本学は、地域の特徴を活かしつつ、特色ある教育・研究により、信頼される医療人の育成及び世界に情報を発信する研究者を養成することを目的とし、もって人類の健康、医療、福祉の向上と発展に貢献することを使命とする。

医学科は、幅広い教養と医学に関する専門的な知識・技能を備え、医の倫理に徹し、かつ旺盛な探究心を持った医師及び医学研究者を育成し、もって医学の進歩、発展に寄与し、併せて社会の福祉に貢献することができる人材の育成を目的とする。

看護学科は、幅広い教養と倫理観に基づいた高い専門知識と技術を有し、広く健康生活を支援できる看護職者及び看護学研究者を育成し、もって看護学の進歩、発展に寄与し、併せて社会の福祉に貢献することができる人材の育成を目的とする。

2. 大学の基本的な目標

一県一医大構想のもと地域の大きな期待により開学された滋賀医科大学は、地域に支えられ世界に挑戦する大学として、「患者の立場に立った人に優しい全人的医療教育」、「地域医療への理解」や「独自の倫理教育」、「臨床能力の高い人材の育成」等を実践する各種プログラムを活用した医学・看護学教育を推進することにより、高度専門医療人の育成と創造性に富んだ研究者を輩出することを使命とする。

3. 特徴

大学の基本的な目標を踏まえ、次のことに取り組んでいる。

- ・倫理教育として、解剖体慰霊式や解剖体納骨慰霊法要、献体受入式に学生が参加して、生命の尊厳に対する畏敬の念をもち、医療人として高い倫理観を涵養することに努めている。
- ・地域の医師不足という社会的な課題に対する様々な取組を実施している。
 - ①入学試験において「地域枠」を拡充
 - ②「臨床実習」における診療所実習の配置
 - ③県内の病院に活動拠点を設けての臨床実習の実施
 - ④地域で活躍する同窓生や地域住民が「里親」や「プチ里親」となり、学生と交流するとともに、宿泊研修を通じて滋賀県の魅力をアピール
- ・高齢化社会の進展を踏まえて、訪問看護師を育成するプログラムの構築と開講。
- ・医学部附属病院看護師による実践の知の教授。
- ・基礎医学研究医の不足への対応として、入学定員の増員と、研究医コースによる養成活動の実施。
- ・多職種が連携するチーム医療に対応するため、医学科と看護学科の合同授業の実施。

[想定する関係者とその期待]

滋賀医科大学医学部の教育では、在学生、教員、臨床（臨地）実習における患者、卒業生及びその受け入れ機関、ならびに一般県民を関係者と想定する。その期待は、信頼される良き医療人及び研究者を育成し、その活躍を通じて、医学及び看護学の進歩・発展に寄与するとともに、地域医療を含めた社会の福祉に貢献することである。

II 「教育の水準」の分析・判定

分析項目 I 教育活動の状況

観点 教育実施体制

(観点に係る状況)

- 本学の学部は、医学部（医学科、看護学科）のみで、教員組織は講座制とし、多くの講座は大講座としている。
- 講師以上の教員採用は公募を原則とし、全学的に教員の任期制を導入しており、平成 28 年 3 月 31 日現在で任期制教員は全教員の 95.5% を占めている。また、教員への年俸制を、平成 27 年 3 月 1 日から導入し、平成 28 年 3 月 31 日現在 33 名（全教員の 10.5%）に適用している。
- （独）大学評価・学位授与機構による平成 27 年度実施大学機関別認証評価の評価報告書（以下、評価報告書）P10、2-2-①のとおり、教育課程や教育方法等、教育全般について、実質的な審議検討を行う組織として、教育担当の理事（副学長）を長とする医療人育成教育研究センターを設置している。センターには、入試方法検討、学部教育、大学院教育、教育方法改善、調査分析及び学生生活支援の 6 部門と、生涯学習支援の 1 室を設置、学生生活支援部門の下に障害学生支援、里親学生支援の 2 室を設置し、各学科、学内教育研究施設及び医学部附属病院の教員に加え、学生課及び学生課入試室の事務職員が構成員となっている。また、センターを運営する組織として、運営委員会を設けている。
- 教育の質の向上については、毎年度教育方法改善部門が、学生のほか、第三者（滋賀大学教育学部教授 2 名 1 組）による授業評価を実施している。評価はとりまとめの上、教員に自己評価のためフィードバックし、その後提出された意見や感想、反論、改善策は、授業評価実施報告書としてまとめ、教育の質の改善に向けてホームページで学内に公開している。また、ファカルティ・ディベロップメント（FD）に関する講演会や研修会を継続的に企画・実施（資料 1-1）している。
- 調査分析部門では、学部卒業生、大学院修了者及び就職先の医師や看護師等に対して、学習成果に関する調査等を行っている。
- 教員の評価としては、毎年度人事評価を実施し、結果は賞与の成績率や昇給などの参考にしている。また、授業評価等に基づきベストティーチャー賞（別添資料 1）の表彰を行っている。
- 学生の受入について、地域の医師確保等の観点から、医学科の入学定員を平成 21 年度から 23 年度にかけて 17 名増やした。
また、地域卒を、推薦入試で 13 名、学士編入学で 5 名設けつつ、学力的に一定の要件を満たした者を受け入れている。また、一般入試と学士編入学には滋賀県医師養成奨学金（卒業後一定期間地域医療等への従事を条件）を 10 名分用意し、地域卒全体としては、平成 20 年度以前の 7 名から最大 28 名と大幅に増やしている。
- 学生支援としては、学生生活支援部門会議を頻回に行い、学生の生活、クラブ活動等にきめ細かな対応を取るとともに、クラス担任、学年担当、副担当を配置し、学年全員へ

資料 1-1 FD 研修開催状況

年度	回数	参加者(人)
H22	6	242
H23	6	176
H24	5	221
H25	6	224
H26	5	214
H27	5	215
計	33	1,292

(出典 本書のために作成)

の周知、指導・助言にあたる体制をとっている。特に、新入生に対しては、身近な相談相手として数名のグループに1名のアドバイザー教員を配置しているほか、保健管理センターの専任講師と看護師が、毎年、新入生全員と個人面談を実施し、相談しやすい体制づくりに努めている。

- 医学科5、6年では、国家試験対策を要する者に後期アドバイザーを配置し、看護学科4年には、卒業論文の作成にあたり研究指導を担当する教員が、同時に看護師等国家試験対策にあたっての個別指導を行っている。
- 平成19年度に文部科学省学生支援GPに採択された『地域「里親」による医学生支援プログラム』を継承し、将来滋賀県内で働くことに興味を持つ医学生や看護学生と、地域で活躍する同窓生や地域住民が「里親」や「プチ里親」となって交流の機会を設け、生活や進路についての助言や支援を行っている（別添資料2）。
- 外部評価としては、平成27年度に大学機関別認証評価を受審し、同機構が定める大学評価基準を満たしているとの評価を得ている。

(水準)

期待される水準を上回る

(判断理由)

- 学部の目的とする医学及び看護学における医療人を育成するため、教育全般について審議検討する組織として医療人育成教育研究センターを設け、機動的な対応ができる体制を整えている。
- 教員の資質向上への取組として、任期制や年俸制、人事評価並びに表彰制度に加え、授業評価等の各種調査やFDを実施している。
- 学生支援としては、クラス担任等のほか、学年に応じたアドバイザー教員をきめ細かく配置するとともに、地域の方によるサポート制度も設けている。

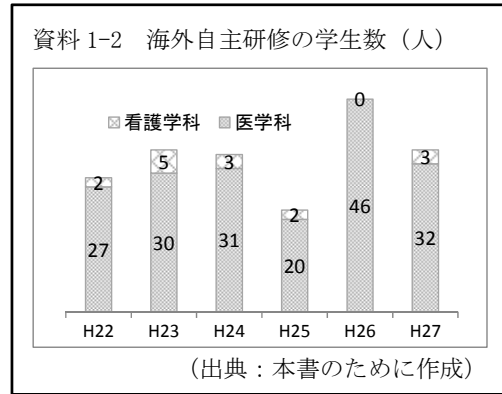
観点 教育内容・方法

(観点到係る状況)

1) 医学科

- 6年一貫教育の方針でくさび形、逆くさび形のカリキュラムを編成している。
- 入学から2年前期までは、幅広い教養を身につけ豊かな人格形成を目指し、準備教育モデル・コア・カリキュラムに基づく物理学、化学、生物学等の専門準備教育を行うとともに、医学・医療の実際を学び、その修得の動機付けをする目的で「医学概論Ⅰ・Ⅱ」や「医学・生命科学入門Ⅰ・Ⅱ」、「早期体験学習」等を実施している。
- 専門教育科目では、医学教育モデル・コア・カリキュラムに基づき、臓器・器官別の系別統合講義を行い、基礎（形態・機能）から病態（疾病）まで系統的に学ぶことができるようにしており、併せて小グループによる少人数能動学習の形態も取り入れて、能動的学習態度、コミュニケーション能力、協調性等の修得に取り組んでいる。
- 3年後期から4年にかけては、医学研究と医療行為が社会的・倫理的にどのような問題を伴うことになるのかを考える「医の倫理」を設けている。

- 4年では、生命科学の研究に直に触れることを目的とした自主研修を設け、毎年度一定数の学生が海外で研修を行っている（資料1-2）。また、臨床実習に先立ち基本的臨床技能の習得のため、スキルズラボを活用した「臨床実習入門」を実施し、臨床実習の履修には、C B T (Computer Based Testing：臨床実習までに修得しておくべき必要不可欠な医学的知識を総合的に理解しているかどうかを評価する試験)とO S C E (Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験)に合格することが必須となっている。



- 5年から始まる臨床実習では、本学医学部附属病院や地域の医療機関等で、医師の指導のもと医療チームの一員として診療に参加するクリニカルクラークシップ（診療参加型臨床実習）形式で実施しており、医師として基本的な生きた知識、技能、態度を身につけることとしている。
 実習に先立ち、学生が診療に参加するための知識や実技能があることを認める「スチューデントドクター」の認定式を開催し、学長から認定証を授与するとともに、学生による決意表明があり、改めて、医学生としての自覚や心構え、医療人の一員となることの責任感や使命感を認識させている。

- 社会からの要請でもある地域に定着する医師の育成に関しては、「プライマリ・ケア医を育成する」、「疾病を有する一個人としての患者に適切に対応する全人的医療ができる医師を育成する」といった必要性から、現代G P及び医療人G Pに採択された「産学連携によるプライマリ・ケア医学教育」と「一般市民参加型全人的医療教育プログラム」を継承し、正規の科目として「臨床実習」における診療所実習や「全人的医療体験学習」として実施している。

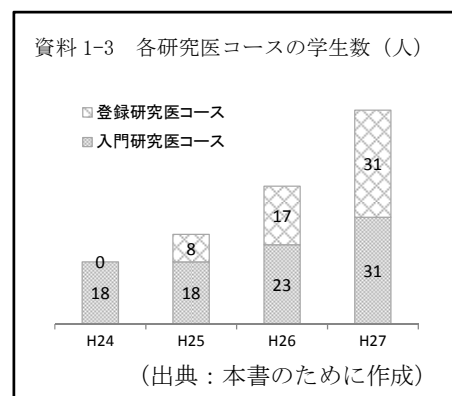
さらに、滋賀県内の医師偏在と同東近江地域における医師不足を背景に、平成 22 年度から、滋賀県等の要請の下、東近江市内にある国立病院機構滋賀病院（現 東近江総合医療センター）を活動拠点として、医師を外向させ、研修医の臨床能力向上を図り、総合診療の研修指導や地域医療を担う医師の養成と確保に取り組んでおり、平成 24 年度からは、同センターにおいて医学科学生の臨床実習を開始した。

加えて、平成 27 年度には、滋賀県内における人口減と高齢化による患者構成の変化を見据えるとともに、医学教育の国際基準への対応に向けた臨床実習期間の充実のため、地域医療機能推進機構（JCHO）と協定を締結し、総合医療を行える医師の養成に向け、大津市内のJCHO滋賀病院にも活動拠点を設けて臨床実習を行うこととした。

- 基礎医学の研究と教育を担う研究医が不足していることへの対応として、平成 23 年度から入学定員を研究医枠として2名増員し、研究への興味を引き起こすため、1年の医学・生命科学入門Ⅱで、研究室紹介を行っている。

その後、平成 24 年度には、「産学協働支援による学生主体の研究医養成」が文部科学省「基礎・臨床を両輪とした医学教育改革によるグローバルな医師養成」事業として選定された。

学生の主体的な探究活動をサポートしながら研究活動の場を提供する入門研究医コースと、具体的なテーマを持って研究活動に参加する登録研究医コースを設けており、参加学生は開始年度の18名



から 27 年度は 62 名へと 3.4 倍に増えている（資料 1－3）。学会発表や論文発表を支援しており、基礎医学の各研究領域で成果を発表している者もいる（資料 1－4）。

資料 1-4 研究医コース学生による主な研究成果

■論文（学術誌名）

Prion protein- and cardiac troponin T-marked interstitial cells from the adult myocardium spontaneously develop into beating cardiomyocytes (Scientific Reports)

■学会「演題」

- ・第 51 回日本交通科学学会総会・学術講演会
「自動車運転中の体調急変と通報システム－死亡例解析結果からの提言－」
- ・第 58 回日本神経化学学会大会
「Maternal separated mice show the anxiety-and fear related behavior and change neurogenesis in the limbic system.」
- ・第 74 回日本公衆衛生学会総会
「日本国民の性・年齢階級、居住地域別の一日の強度別身体活動の比較：NIPPON DATA2010」
- ・第 93 回日本生理学会大会
「ヒト Kv1.5 チャンネルと抗不整脈薬ベプリジルとの相互作用について」

（出典：本書のために作成）

2) 看護学科

- 1 年から教養科目だけでなく専門基礎科目や専門科目も学ぶ、くさび形カリキュラムとなっており、教養科目及び看護専門基礎科目、基礎看護学の上に臨床看護学（母性、小児、成人、高齢者、精神）を積み上げる形で構成されている。
- 専門科目の大部分は必修科目となっており、講義・演習等による学習と体験的学習をバランス良く組み合わせることにより学習効果を高めることを意図して、1 年の「基礎看護学実習 I」から 4 年の「統合看護学実習」までの看護学実習 10 科目を、並行して開講するフィジカルアセスメント等の授業科目と有機的に関連させながら展開している。
- 世界的な健康課題を学ぶ「国際看護活動論」や、多職種との連携と協働に不可欠なコミュニケーション能力を強化するため「臨床コミュニケーション学」といった科目も配置するとともに、「看護研究方法論」等の科目では、臨床的知見を踏まえた看護学研究や論文作成の方法を教授しており、学会や研究会への参加も積極的に促している。また、海外における自主研修も取り入れている（P 1－5、資料 1－2）。
- 平成 24 年度には「看護倫理」を必修科目として新たに配置し、倫理的概念のみならず、それらの問題にどのように取り組むことができるのかなど、具体的事例を挙げて講義を行っている。
- 実習では、本学医学部附属病院において看護部及び看護臨床教育センターとの緊密な連携・協力に基づき実践的に行っており、授業の一部においても、附属病院看護師が講義や演習で看護臨床教授等（臨床現場の医療人に対して、選考のうえ、看護臨床教授から同助教までの称号を付与）として関わり、実践の知を教授している。
- 卒業要件単位数は 125 単位以上であり、保健師助産師看護師学校養成所指定規則に定められている必要単位を満たしている。
- 保健師課程及び助産師課程を設置しており、2 年の履修希望者に対してそれぞれ選抜を行い、認められた者が 3 年から履修できるものとしている。両課程についても、講義と演習とを組み合わせることで学習効果を高めることで臨地実習に効果的につながり、実践的な実習になるよう編成している。なお、これらも、保健師助産師看護師学校養成所指定規

則に定められている必要単位を満たしている。

- 高齢化社会の進展を踏まえ、滋賀県からの補助を受けて、訪問看護師を育成するプログラムを構築し、3年の学生を対象に10名を募集したところ7名の受講生を得て、平成28年1月に開講した。

3) 両学科に跨る教育

- 医学科と看護学科を有することから、多職種が連携するチーム医療で必要とされる能力の修得に資する取組として、両学科1年生の合同授業として、早期体験学習(医学科)・基礎看護学実習I(看護学科)を必修科目としているほか、講義の一部も合同で行っている。医学科の臨床実習では、医学部附属病院看護部における実習も行っている。
- 特に、本学独自の倫理教育として、生命の尊厳についての理解をより深め、医療人としての高い倫理観を養うため、献体受入式には医学科2年の学生を参列させ、実習後には比叡山延暦寺での解剖体納骨慰霊法要に参列させて学生からご遺族に直接返骨するなど、解剖学実習における献体の受け入れから返骨までを学生自身の手で行っている。さらに、解剖体慰霊式には、医学科及び看護学科の学生が参列することとしている。

4) 学習環境など

- 自主的な学習環境に関しては、評価報告書P37、7-1-①、P39、7-1-④のとおり、防犯等にも配慮しつつ、附属図書館等の施設を24時間利用可能にするとともに、図書館内にはアクティブラーニング室を、学内各所に少人数能動学習に使用する多目的教室18室、学習室5室を設けて、学生の自主的学習やグループ学習の場を提供している。
- 勉学へのモチベーション向上に関しては、大学独自の奨学金として、毎年度、学部の2年生以上の成績優秀の学生に対して滋賀医科大学奨学金を給付している。

(水準)

期待される水準を上回る

(判断理由)

- 医学、看護学それぞれの領域に関する高い専門的知識及び技能を授ける授業を、倫理観の涵養に配慮しつつ展開している。
- 医学科、看護学科ともに、医師不足、高齢化社会の進展といった社会的要請にも応じた教育を実施している。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

観点 学業の成果

(観点に係る状況)

- 資料1-5のとおり、医学部における標準修業年限内の卒業率は、平成22年度からの6年間の平均では91.0%、また、標準修業年限×1.5年内の卒業率では99.2%となっており、概ね標準修業年限内に卒業している。
- 医師・看護師等の各国家試験の合格率(資料1-6)は、平成22年度からの6年間の平均は、ほとんど95%以上であり、各年度の合格率の値を見ても全国平均を上回っている。

資料1-5 医学部における、「標準修業年限内」及び「標準修業年限×1.5年内」の卒業生(人)・率

年度	卒業生	標準修業年限内の		標準修業年限×1.5年内の	
		卒業生	卒業率	卒業生	卒業率
H22	152	143	94.1%	150	98.7%
H23	137	130	94.9%	135	98.5%
H24	147	131	89.1%	147	100.0%
H25	138	125	90.6%	135	97.8%
H26	148	133	89.9%	148	100.0%
H27	154	135	87.7%	154	100.0%
平均			91.0%		99.2%

(出典：本書のために作成)

資料1-6 国家試験合格率

試験実施年	医師			看護師			保健師			助産師		
	新卒者	既卒者含む	全国平均	新卒者	既卒者含む	全国平均	新卒者	既卒者含む	全国平均	新卒者	既卒者含む	全国平均
H23	99.0%	99.0%	89.3%	100.0%	100.0%	91.8%	100.0%	100.0%	86.3%	100.0%	100.0%	97.2%
H24	97.6%	96.5%	90.2%	100.0%	100.0%	90.1%	98.6%	97.1%	86.0%	100.0%	100.0%	95.0%
H25	93.5%	92.9%	89.8%	94.5%	92.9%	88.8%	100.0%	98.5%	96.0%	100.0%	100.0%	98.1%
H26	92.6%	91.4%	90.6%	98.2%	98.3%	89.8%	98.5%	98.5%	86.5%	100.0%	100.0%	96.9%
H27	93.2%	92.8%	91.2%	100.0%	100.0%	90.0%	100.0%	100.0%	99.4%	100.0%	100.0%	99.9%
H28	93.9%	92.7%	91.5%	100.0%	100.0%	89.4%	100.0%	100.0%	89.8%	100.0%	100.0%	99.8%
平均	95.0%	94.2%	90.4%	98.8%	98.5%	90.0%	99.5%	99.0%	90.7%	100.0%	100.0%	97.8%

(出典：本書のために作成)

- 授業評価については、学部では、毎年度講師以上の教員(臨床医学講座は希望者のみ)及び単独で授業を担当する非常勤講師を対象に学生による評価を実施している。平成22年度以降の総合評価(満足できる授業であった。)の平均は、4点満点で、学生によるものは3.4となっている(資料1-7)。

資料1-7 学部生による授業評価(総合評価)

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	平均
4点満点	3.4	3.5	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4

(出典：授業評価実施報告書第8号～第12号、学内資料)

(水準)

期待される水準を上回る

(判断理由)

滋賀医科大学医学部 分析項目Ⅱ

- 9割を超える者が、標準修業年限内に卒業しており、各国家試験合格率も全国平均を上回っている。

観点 進路・就職の状況

(観点に係る状況)

- 資料1-8のとおり、就職率は、平成22～27年度の平均で、医学科93.5%、看護学科93.1%となっており、ほぼ全てが臨床研修医、看護師等として就職している。
地域の医師確保が求められているが、臨床研修医として滋賀県内への就業率は、平成22～27年度の6年において、4割を超える年が5年、平均では42.9%となっている。

資料1-8 進路状況

区分		卒業年度						平均	
		H22	H23	H24	H25	H26	H27		
医学科	卒業者数 (A)	104	87	109	95	104	114		
	進学者数 (B)	1		1			1		
	就職者数 (C)	101	83	99	88	95	107		
	臨床研修医のうち	滋賀県内(D)	41	39	34	41	39	51	
		県内就業率	40.6%	47.0%	34.3%	46.6%	41.1%	47.7%	42.9%
		滋賀県外	60	44	65	47	56	56	
	計	101	83	99	88	95	107		
就職率 (C/A)	97.1%	95.4%	90.8%	92.6%	91.3%	93.9%	93.5%		
看護学科	卒業者数 (A)	68	72	65	68	70	65		
	進学者数 (B)	3		3	2	2	2		
	就職者数 (C)	63	68	58	64	66	61		
	看護師等	滋賀県内(D)	51	35	38	33	34	32	
		滋賀県外	12	33	20	28	32	28	
		計	63	68	58	61	66	60	
	看護師等以外				3		1		
就職率 (C/A)	92.6%	94.4%	89.2%	94.1%	94.3%	93.8%	93.1%		

(出典：本書のために作成)

- 資料1-9のとおり、各学科の卒業生が就職している施設の医師、看護師には、卒業後から間もない2年目の者について「本学の教育における学習成果に関するアンケート調査」を平成23年度から実施している。医学（看護学）等の「知識」、医学（看護学）の手技といった「技能」、協調性、責任感等といった「態度」について有しているかを尋ねており、「あてはまる」、「ややあてはまる」と回答している割合を見ると、知識、態度面において平均で80%を超えている。

資料1-9 本学の教育における学習成果に関するアンケート調査（抜粋）

年度	対象	知識			技能			態度		
		あてはまる	ややあてはまる	計	あてはまる	ややあてはまる	計	あてはまる	ややあてはまる	計
H23	医学科H21年度卒	63.0%	29.7%	92.7%	39.9%	51.4%	91.3%	72.3%	23.7%	96.0%
H24	医学科H22年度卒	43.7%	43.7%	87.4%	32.6%	51.1%	83.7%	54.3%	34.7%	89.0%
H25	医学科H23年度卒	51.0%	43.8%	94.8%	37.5%	41.7%	79.2%	55.1%	35.5%	90.6%
H26	医学科H24年度卒	51.5%	46.2%	97.7%	31.8%	56.1%	87.9%	68.4%	25.8%	94.2%
H27	医学科H25年度卒	56.4%	39.3%	95.7%	38.5%	52.1%	90.6%	62.9%	35.0%	97.9%
	医学科の平均			93.7%			86.5%			93.5%
H23	看護学科H21年度卒	18.2%	71.2%	89.4%	3.0%	51.5%	54.5%	26.9%	50.0%	76.9%
H24	看護学科H22年度卒	30.6%	66.7%	97.3%	16.7%	47.2%	63.9%	40.2%	51.5%	91.7%
H25	看護学科H23年度卒	15.9%	63.5%	79.4%	7.9%	60.3%	68.2%	24.2%	56.7%	80.9%
H26	看護学科H24年度卒	20.5%	56.4%	76.9%	12.8%	56.4%	69.2%	35.7%	44.1%	79.8%
H27	看護学科H25年度卒	17.6%	76.5%	94.1%	9.8%	52.9%	62.7%	33.2%	38.5%	71.7%
	看護学科の平均			87.4%			63.7%			80.2%

(出典) 医療人育成教育研究センター 調査分析部門報告書（平成23～27年度）

- 医学科卒業生並びに博士課程修了者、看護学科卒業生並びに修士課程修了者が就職している病院長や施設長にも、「信頼される医療人に関するアンケート調査」を3年に1度

滋賀医科大学医学部 分析項目Ⅱ

行っており、評価報告書P35、6-2-②を見ると、平成25年度実施の調査では、患者の立場に立った診療（看護）といった「患者に対する態度の評価」、リーダーシップの発揮といった「メディカルスタッフに対する態度の評価」や「チーム医療を構築する能力の評価」といった設問に対して、「できる」、「どちらかといえばできる」と回答している割合の合計は、概ね80%を超えており、特に「患者に対する態度の評価」については90%を超えている。

(水準)

期待される水準を上回る

(判断理由)

- 医学科、看護学科ともに就職率は、いずれも平均で90%を超えており、臨床研修医、看護師等として就職している。
- 就職先へのアンケートでは、医学（看護学）等の知識、協調性、責任感等の態度を有しているとの評価が得られ、病院長や施設長へのアンケートでは、特に「患者に対する態度の評価」について90%を超える高い評価を得ている。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

- 社会からの要請でもある地域に定着する医師の育成に関して、第1期中期目標期間における各G P事業を継承しつつ、第2期では、学生の受入に関しては地域枠を拡充し、滋賀県内で医師不足となっていた地域の病院に活動拠点を設けて、臨床実習を開始するとともに、県内の人口減、高齢化に伴う患者構成の変化も見据えて活動拠点を増やしている。
- 高齢化社会の進展を踏まえ、訪問看護師を育成するプログラムを構築、開講している。
- 基礎医学研究医の不足という課題に対しては、研究医コースを設けており、参加する学生も開始に比べて3.4倍と増加しており、研究成果を発表している者もいる（P 1－5～6、資料1－3、4）。
- 本学独自の倫理教育として、学生が献体受入式、解剖体慰霊式並びに比叡山延暦寺での納骨慰霊法要に参列し、遺族への返骨と納骨も学生自身が行うことにより、生命の尊厳を学び医療人としての高い倫理観を養う取組を継続して行っている。

(2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

- 平成 22～27 年度において、平均で9割以上の者が標準修業年限内に卒業している（P 1－8、資料1－5）。
- 平成 22～27 年度において、医師、看護師等の国家試験合格率は新卒者で平均95%以上となっており、各年度の合格率の値も全国平均を上回っている（P 1－8、資料1－6）。
- 就職率は、平成 22～27 年度の平均で、医学科 93.5%、看護学科 93.1%と、継続的に高水準を維持しており、ほぼ全てが医師、看護師等として就職している（P 1－10、資料1－8）。
- 就職先からのアンケートでは、医学（看護学）等の知識、協調性、責任感等の態度を有しているとの評価が得られ、病院長や施設長へのアンケートでは、特に「患者に対する態度の評価」について90%を超える高い評価を得ている。

2. 大学院医学系研究科

I	大学院医学系研究科の教育目的と特徴	・・・	2-2
II	「教育の水準」の分析・判定	・・・	2-3
	分析項目 I 教育活動の状況	・・・	2-3
	分析項目 II 教育成果の状況	・・・	2-7
III	「質の向上度」の分析	・・・	2-11

I 大学院医学系研究科の教育目的と特徴

1. 目的

医学及び看護学の領域において、優れた研究者及び高度な知識と技術をもつ専門家を養成することを目的とし、もって、医学及び看護学の進歩と社会福祉の向上に寄与することを使命とする。

博士課程医学専攻は、自立して創造的研究活動を行うのに必要な高度の研究能力と、その基礎となる豊かな学識及び人間性を備えた優れた研究者及び医療人を育成し、併せて医学の進歩と社会福祉の向上に寄与することができる人材の育成を目的とする。

修士課程看護学専攻は、広い視野に立って精深な学識を授け、看護学における研究能力と人間性を備えた優れた研究者を育成するとともに、高度な先進的看護を支える確かな専門知識と看護技術をもつ優れた看護の専門家を養成し、併せて看護学の進歩と社会福祉の向上に寄与することができる人材の育成を目的とする。

2. 特徴

- 博士課程の研究指導は、複数教員による指導体制をとり、多角的な助言と客観的評価を重視している。

研究状況の確認のため、プロGRESS・レポートの提出、ポスター発表会といった中間評価を行っている。ポスターは公開展示し、研究の公正を図るとともに、多くの異なる研究分野の教員から指導並びに評価を受けることができるようにしている。

博士論文は、国際ジャーナルに受理されることを基準にしており、審査に係る研究発表会も公開で行い、審査者10名も、客観性、透明性、公平性を高めるため、指導教員や所属講座の教員、及び共著者を除き、学外者を必ず含めることとしている。さらに、審査基準も明確化し、各項目も点数化して評価している。

- 修士課程では、1年次の研究デザイン発表会や2年次の中間発表会、修士論文発表会を公開で実施しており、出席した全教員からの研究への助言並びに評価を得る機会として活用している。

修士論文発表会では、教員のほか外部評価者も入れて、7項目からなる客観的評価をしている。

- 両課程とも、医師、看護師等の医療従事者のニーズに応じて、社会人入学者を多く受け入れている。

[想定する関係者とその期待]

滋賀医科大学大学院医学系研究科の教育では、在学生、教員、修了生及びその受け入れ機関、ならびに一般県民を関係者と想定する。その期待は、信頼される良き医療人及び研究者を育成し、その活躍を通じて、医学及び看護学の進歩・発展に寄与するとともに、地域医療を含めた社会の福祉に貢献することである。

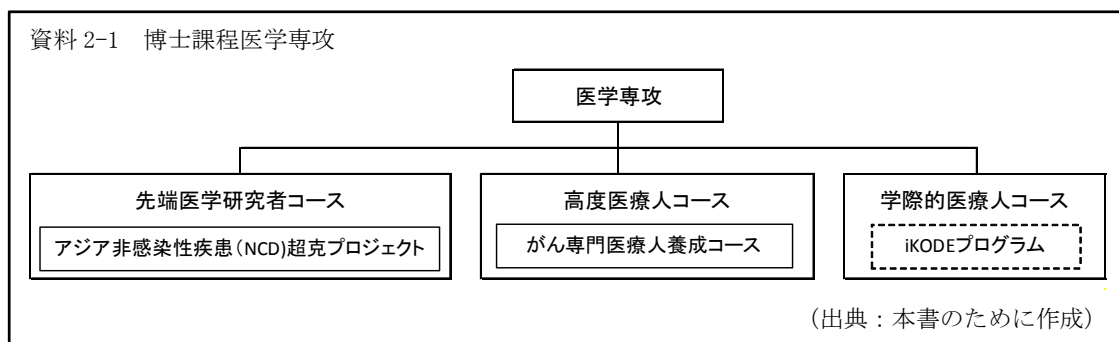
II 「教育の水準」の分析・判定

分析項目 I 教育活動の状況

観点 教育実施体制

(観点に係る状況)

- 本学大学院は、医学系研究科のみを有し、博士課程医学専攻、修士課程看護学専攻からなっている。
- 博士課程は、平成 26 年度に、1 専攻 3 コース（先端医学研究者、高度医療人、学際的医療人）に改組した（資料 2-1）。
従前は 5 専攻に分かれていたが、教員の分散により、がん、生活習慣病といった多くの専門領域にまたがる医学への対応が困難であったこと、また、医学部以外の大学との医工連携といった学際的研究も展開しており、その対応にあたっては 1 専攻の方が融合の自由度が高いと判断し、本学のミッションの再定義に沿った人材育成も踏まえて 3 コースを設置した。



- 修士課程は、「教育研究」と「高度専門職」の 2 コースからなる。
- 大学院の教育は、医学部、学内教育研究施設及び医学部附属病院の教員が兼務して行っている。
- 評価報告書 P 10、2-2-①のとおり、教育課程や教育方法といった教育全般について、実質的な審議検討を行う組織として、教育担当の理事（副学長）を長とする医療人育成教育研究センターを設置している。センターには、入試方法検討、学部教育、大学院教育、教育方法改善、調査分析及び学生生活支援の 6 部門と、生涯学習支援の 1 室を設置、学生生活支援部門の下に障害学生支援、里親学生支援の 2 室を設置し、各学科、学内教育研究施設及び医学部附属病院の教員に加え、学生課及び学生課入試室の事務職員が構成員となっている。
- 博士課程の研究指導は、複数教員による指導体制をとり、多角的な助言と客観的評価を重視している。学生には、入学時のオリエンテーションの際に、主指導教員に加え、講座の枠を超えて副指導教員を定めることができる旨案内しており、学生は主指導教員と相談のうえ副指導教員を決める。副指導教員が決まらなかった場合は、大学院教育部門会議により推薦された者または同部門会議委員が副指導教員となる。研究の方向性が変化した場合などは、指導教員を変更することができる。
- 修士課程では、テーマ選定及び研究方法の検討から論文作成まで、指導教員が直接指導を行うこととしている。
- 入学者選抜に関しては、博士課程では主に医師、修士課程では看護師等医療技術職とい

滋賀医科大学大学院医学系研究科 分析項目 I

った就業者のニーズに応えるため、社会人入学者を多く受け入れており（資料2-2）、春季のほか、秋季（10月）入学の選抜も実施している。
加えて、修士課程の社会人学生に対しては、標準修業年限（2年）を超えて修了できる長期履修制度も設けている。

	H22	H23	H24	H25	H26	H27	平均
博士課程	23	23	28	24	25	20	
入学定員	30	30	30	30	30	30	
比率	76.7%	76.7%	93.3%	80.0%	83.3%	66.7%	79.4%
修士課程	10	14	16	16	12	4	
入学定員	16	16	16	16	16	16	
比率	62.5%	87.5%	100.0%	100.0%	75.0%	25.0%	75.0%

（出典 本書のために作成）

- 経済的な援助としては、独自に「滋賀医科大学大学院教育研究支援経費」を設けている。基礎医学研究の活性化とその基盤強化を図るため、博士課程修了後に、基礎医学研究医を目指し、強い研究意欲を有する者を対象に、在学中に教育・研究に専念できるよう、選考のうえ支給している。
- 博士課程では、文部科学省の「博士課程教育リーディングプログラム」に、「アジア非感染性疾患（NCD）超克プロジェクト」が採択されており、国内外で活躍できるリーダーとなる人材を養成するため、国外は指定校特別入試、国内を一般入試に分け、各々に応じた選抜方法としている。さらに、グローバルリーダーの育成を目的とすることから、特にコミュニケーション等の英語能力の評価にも重点を置いて選抜を行っている。

（水準）

期待される水準を上回る

（判断理由）

- 博士課程では、多様化する医学、医工連携に合わせつつ、本学のミッションの再定義に沿った人材育成のため、先端医学研究者、高度医療人、学際的医療人の3コースに改組をしている。
- 研究指導に関しては、複数教員による指導体制をとり、多角的な助言と客観的評価を重視している。
- 博士課程・修士課程ともに医療に従事する者のニーズに応じて、社会人入学者を多く受け入れている。

観点 教育内容・方法

（観点到係る状況）

1) 博士課程医学専攻

- 先端医学研究者、高度医療人、学際的医療人の3コースを設けており、教育課程は、各コースの共通科目とコース別の科目からなっている。共通科目には、基本的な科学的方法の習得などを旨とする「医学総合特論」や基本的な研究手法を習得する「テクニカルセミナー」等といった基盤的な科目を必修科目として配置するとともに、基礎医学が臨床医学にどのように活かされているかを学ぶ「基礎と臨床の融合セミナー」を選択必修科目として配置している。

滋賀医科大学大学院医学系研究科 分析項目 I

- コース別の科目として、先端医学研究者コースでは、最新の実験技術を学ぶ「パイオニアセミナー」や、「先端医学研究技法」を必修科目とするとともに、研究領域に応じた実習を選択科目として配置している。また、同コースには、「アジア非感染性疾患（NCD）超克プロジェクト」を開設しており、別途、英語コミュニケーションを重視した教育課程を編成している。
- 高度医療人コースでは、臨床研究に重点を置くとともに専門医としてふさわしい医療技術の習得にあたって、基本的な科学的解析法の理解を図る「臨床医学研究総論」や、「疫学・医療統計学」及び「医療倫理学法制総論」を必修科目とするとともに、臨床における専門領域に応じた実習を選択科目として配置している。同コースには、文部科学省「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」に採択されたプログラム「次代を担うがん研究者・医療人養成プラン」により、がん専門医療人養成コースを開設しており、新しいがん診断・治療法や手術療法の開発を担う研究者、地域のがん薬物療法を支える薬剤師や、地域の放射線治療を支える放射線治療医を養成する教育課程を編成している。
- 学際的医療人コースでは、医学に加え工学や理学等の学際的な知識を得るとともに、産学連携の場で活躍できる能力を涵養するため、医学系の科目に加え、医工連携や知的財産に関する科目を選択必修科目として配置するとともに、研究領域に応じた実習を選択科目として配置している。同コースでは、平成 26 年度に文部科学省「グローバルアントレプレナー育成促進事業（EDGEプログラム）」による「医・工・デザイン連携グローバルアントレプレナー育成プログラム（iKODEプログラム）」を組み入れ、本学が培った医工連携の実績を活かし、医学及び工学の技術的な専門知識に加え、デザイン思考を備えたリーダーや起業家の育成を目指すプログラムを展開している。
- 最先端の研究成果を反映させるための取組としては、学内で行われる講演会やシンポジウムや学会参加について、審査の上で大学院講義として認定している。
- 研究指導は、複数教員による指導体制のほか、2年次には希望者に、3年次には全員にプロGRESS・レポートを提出させるとともに、ポスター発表会に参加させて、中間評価を行っている。
ポスターは、学部学生も含めた全学生と教員に公開展示し、研究の公正を図るとともに、多くの異なる研究分野の教員から指導並びに評価を受けることができるようにしている。また、ポスター発表会では、大学院生の発表内容を点数化して評価し、優秀なポスター発表者は表彰してモチベーションの向上に努めているほか、問題点がある場合は本人並びに指導教員に伝えて改善を図っている。
さらに、学生が希望すれば、協定を締結している他大学に特別研究学生として派遣し、他大学の教員からも指導を受けることができる機会を設けている。
- 博士論文は、国際ジャーナルに受理されることを基準にしており、審査に係る研究発表会も公開で行っており、審査者 10 名は、客観性、透明性、公平性を高めるため、指導教員及び共著者を除き、学外者を必ず含めることとしている。審査基準も明確化し、「研究の背景を説明できたか」、「研究の目的を明確に説明できたか」、「研究方法の特徴と限界を理解しているか」、「研究結果を十分に理解し説明できたか」等 10 項目をそれぞれ 3 段階で評価して審査結果を点数化している。

- 毎年度、博士課程学生をリサーチ・アシスタントとして採用しており（資料 2－3）研究指導及び

資料 2-3 RA採用数（人）

	H22	H23	H24	H25	H26	H27
博士課程	11	15	19	17	16	20

（出典 本書のために作成）

研究遂行能力を修得する機会を提供している。

2) 修士課程看護学専攻

- 教育研究、高度専門職の2コースからなっており、各コースに基礎看護学、臨床看護学、公衆衛生看護学の研究領域を設けている。
- 各研究領域の基盤となる知識や研究方法・技法を修得することを目的に「看護学研究方法論」といった共通科目を配するとともに、各研究領域には、それぞれ専門分野の講義と演習を配置している。
- 教育研究コースでは、「看護学特別研究－教育研究コース」の単位数を10単位として研究に重点を置くとともに、高度専門職コースでは、専門分野に応じた「看護学特別研究」4単位に加え、「看護学実習」6単位を必修とすることで、看護の現場における問題解決能力と高度な看護実践が提供できる能力の修得に重点を置いている。また、高度専門職コースの基礎看護学研究領域には、高度な看護管理実践能力を持つ看護管理者の育成を目指す「看護管理実践」を設けている。
- 研究では、1年次の研究デザイン発表会や2年次の中間発表会、修士論文発表会を公開で実施しており、研究デザイン発表会は看護学研究方法論Ⅴの一部として単位認定し、中間発表会では出席した全教員からの研究への助言並びに評価を得る機会として活用している。
- 修士論文発表会では、学内講師（研究業績が准教授、講師に準ずるとして学内講師選考基準を満たすとされた助教）以上の全教員及び外部評価者3名により、7項目からなる客観的評価を受け、修了認定の際の論文審査の参考資料としている。

3) 両課程に関する事項

- 自主的な学習環境に関しては、評価報告書P39、7-1-④のとおり、学内の共同利用施設として実験実習支援センターを設置しており、利用登録すれば各種機器を24時間自由に利用できるほか、各研究室の実験室等も24時間利用可能となっている。
- 研究倫理に関しては、評価報告書P29、5-5-⑥のとおり、研究が適正に行われているかを判断するため、博士、修士とも論文審査に際して利益相反に関する自己申告書の提出を求めているほか、研究倫理に関する講義を実施している。さらに、人を対象とする医学系研究に関わるにあたっては、その倫理と知識に関する講習会等を1年度において少なくとも2回以上受講することを条件としている。
- 「学長賞」を設け、優秀な博士・修士論文を作成した学生を表彰している。

(水準)

期待される水準を上回る

(判断理由)

- 博士課程では、「アジア非感染性疾患（NCD）超克プロジェクト」、「医・工・デザイン連携グローバルアントレプレナー育成プログラム（iKODEプログラム）」等、文部科学省の事業にも採択された特徴的なプログラムを設けている。
- 博士課程では、プロGRESS・レポートの提出、ポスター発表会並びに論文審査にかかる研究発表会、修士課程では、研究デザイン発表会、中間発表会並びに修士論文発表会を、それぞれ公開で実施している。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

観点 学業の成果

(観点に係る状況)

- 大学ポートレートで、①標準修業年限内、②標準修業年限×1.5年以内の修了率を見ると、次のとおりである。

・博士課程 ①40.9～56.5%、 ②92.0～95.7%

・修士課程 ①33.3～80.0%、 ②80.0～100.0%

社会人入学者を多く受け入れているが、標準修業年限×1.5年以内では概ね修了している。

- 博士課程では、各コース共通の必修科目について授業評価を実施しており、平成22～27年度において、「講義の内容が理解できた」、「授業に満足している」の設問に対して、「該当」、「やや該当する」と回答した割合の合計は、86.3%、94.4%となっている(資料2-4)。

資料2-4 大学院(博士課程)学生による授業評価(抜粋)

講義の内容が理解できた

	該当する	やや該当する	あまり該当しない	該当しない	該当、やや該当の計
平成22年度	41.8%	48.0%	9.1%	1.1%	89.8%
平成23年度	34.3%	48.5%	14.2%	3.0%	82.8%
平成24年度	42.2%	48.0%	5.4%	4.4%	90.2%
平成25年度	25.8%	56.7%	14.9%	2.6%	82.5%
平成26年度	36.9%	46.7%	15.7%	0.7%	83.6%
平成27年度	42.4%	46.4%	9.5%	1.7%	88.8%
平均					86.3%

授業に満足している

	該当する	やや該当する	あまり該当しない	該当しない	該当、やや該当の計
平成22年度	53.1%	43.6%	3.3%		96.7%
平成23年度	51.1%	38.6%	10.3%		89.7%
平成24年度	59.3%	38.2%	1.5%	1.0%	97.5%
平成25年度	39.0%	52.1%	8.0%	0.9%	91.1%
平成26年度	62.1%	35.6%	2.3%		97.7%
平成27年度	53.8%	39.6%	6.1%	0.6%	93.4%
平均					94.4%

(出典 授業評価実施報告書第8～12号、学内資料)

- 修士課程においても、「授業に対する満足度」を調査しており、平成22～27年度において、「満足」、「ほぼ満足」と回答した割合の合計は84.0%となっている(資料2-5)。

資料2-5 大学院(修士課程)学生による授業評価(抜粋)

授業に対する満足度

	満足	ほぼ満足	普通	やや不満	不満	未回答	満足、ほぼ満足の計
平成22年度	56.5%	19.2%	16.5%	5.2%	2.6%		75.7%
平成23年度	59.4%	25.6%	9.8%	4.5%	0.8%		85.0%
平成24年度	66.3%	21.5%	11.0%	1.2%	0.0%		87.8%
平成25年度	59.5%	23.8%	12.9%	2.9%	1.0%		83.3%
平成26年度	52.0%	36.5%	11.5%	0.0%	0.0%		88.5%
平成27年度	72.8%	10.7%	9.7%	1.9%	1.9%	2.9%	83.5%
平均							84.0%

(出典 授業評価実施報告書第8～12号、学内資料)

- 博士論文は、国際ジャーナルに受理されることを基準にしており、評価報告書P34、6-1-①のとおり、平成24年度から26年度の3年間において、博士課程修了者の論文70編のほとんどが、国際学術雑誌に掲載され、そのうち6編は際立って評価が高い学術雑誌に掲載される等、学術的影響力を持つ研究成果となり、また、3編は新聞等で報道されるなど社会的に注目される研究成果となっている。

(水準)

期待される水準を上回る

(判断理由)

- 博士課程、修士課程ともに、社会人入学者が75%以上と多く受け入れているが、標準修業年限×1.5年以内で80%以上の者が修了している。
- 授業に関する満足度も、博士課程94.4%、修士課程84.0%と高い値となっている。
- 博士課程の論文のほとんどが、国際学術雑誌に掲載されており、そのうち6編は際立って評価が高い学術雑誌に掲載される等、学術的影響力を持つ研究成果となり、また、3編は新聞等で報道されるなど社会的に注目される研究成果を挙げている。

観点 進路・就職の状況

(観点に係る状況)

- 就職率に関して、資料2-6のとおり、博士課程では、平成22～27年度の間、毎年ほぼ90%を超え、平均は95.7%となっており、そのほとんどが医師、医学部の教員または研究者として就職している。
- 修士課程では、平成22～27年度の平均は81.1%となっており、そのほとんどが看護師等やそれらを育成する教員として就職している。

資料2-6 大学院修了者の進路状況

区分		修了年度						平均
		H22	H23	H24	H25	H26	H27	
博士課程	修了者数 (A)	21	19	23	25	22	26	
	進学者数 (B)							
	就職者数 (C)	21	19	22	24	19	25	
	医師等	18	13	13	18	7	13	
	教員、研究者	3	5	5	6	11	9	
	その他		1	4		1	3	
	進学率 (B/A)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
就職率 (C/A)	100.0%	100.0%	95.7%	96.0%	86.4%	96.2%	95.7%	
修士課程	修了者数 (A)	5	10	16	11	16	15	
	進学者数 (B)	1					2	
	就職者数 (C)	4	8	14	8	16	10	
	看護師等	3	6	7	4	10	8	
	教員	1	2	6	4	5	2	
	その他			1		1		
	進学率 (B/A)	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	13.3%	
就職率 (C/A)	80.0%	80.0%	87.5%	72.7%	100.0%	66.7%	81.1%	

(出典 本書のために作成)

- 資料2-7のとおり、博士課程、修士課程の修了者が就職している施設の医師、看護師に、修了後2年目の者についての「本学の教育における学習成果に関するアンケート調査」を平成23年度から実施している。医学(看護学)等の「知識」、医学(看護学)の手技といった「技能」、協調性、責任感等といった「態度」を有しているかを尋ねており、「あてはまる」、「ややあてはまる」と回答している割合の平均を見ると、ほぼ80%を超えている。

資料2-7 本学の教育における学習成果に関するアンケート調査(抜粋)

年度	対象	知識			技能			態度		
		あてはまる	ややあてはまる	計	あてはまる	ややあてはまる	計	あてはまる	ややあてはまる	計
H23	博士課程H21年度修了	79.2%	20.8%	100.0%	70.8%	29.2%	100.0%	83.0%	7.9%	90.9%
H24	博士課程H22年度修了	60.0%	6.7%	66.7%	40.0%	33.3%	73.3%	60.0%	27.3%	87.3%
H25	博士課程H23年度修了	26.7%	46.7%	73.4%	40.0%	46.7%	86.7%	40.0%	32.7%	72.7%
H26	博士課程H24年度修了	66.7%	16.7%	83.4%	54.2%	29.2%	83.4%	64.8%	21.6%	86.4%
H27	博士課程H25年度修了	83.3%	16.7%	100.0%	50.0%	50.0%	100.0%	93.2%	6.8%	100.0%
	博士課程の平均			84.7%			88.7%			87.5%
H23	修士課程H21年度修了	33.3%	46.7%	80.0%	33.3%	13.3%	46.6%	41.8%	25.5%	67.3%
H24	修士課程H22年度修了	0.0%	100.0%	100.0%	83.3%		83.3%	45.5%	45.5%	91.0%
H25	修士課程H23年度修了	100.0%		100.0%	66.7%	33.3%	100.0%	18.2%	81.8%	100.0%
H26	修士課程H24年度修了	66.7%	6.7%	73.4%	60.0%		60.0%	67.3%	3.6%	70.9%
H27	修士課程H25年度修了	100.0%		100.0%	83.3%	16.7%	100.0%	100.0%		100.0%
	修士課程の平均			90.7%			78.0%			85.8%

(出典) 医療人育成教育研究センター 調査分析部門報告書(平成23～27年度)

- 評価報告書P35、6-2-②のとおり、医学科卒業生並びに博士課程修了者、看護学科卒業生並びに修士課程修了者が就職している病院長や施設長に「信頼される医療人に関するアンケート調査」を3年に1度行っており、平成25年度実施の調査では、患者の立場に立った診療（看護）といった「患者に対する態度の評価」、リーダーシップの発揮といった「メディカルスタッフに対する態度の評価」や「チーム医療を構築する能力の評価」といった設問に対して、「できる」、「どちらかといえばできる」と回答している割合の合計は、概ね80%を超えており、特に「患者に対する態度の評価」については90%を超えている。

(水準)

期待される水準を上回る

(判断理由)

- 修了者の就職率は高く（平成22～27年度の平均 博士課程95.7%、修士課程81.1%）、職としてもほぼすべてが医療職あるいはそれらを育成する教員となっている。
- 就職先へのアンケートでも、医学（看護学）等の「知識」、医学（看護学）的手技といった「技能」、協調性、責任感等といった「態度」に関する各評価に対して、「あてはまる」、「ややあてはまる」と回答している割合の平均は、ほぼ80%を超え、病院長や施設長へのアンケートでは、特に「患者に対する態度の評価」について90%を超える高い評価を得ている。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

- 多様化する医学、医工連携に合わせて、本学のミッションの再定義における人材育成のため、博士課程を改組し、先端医学研究者、高度医療人、学際的医療人の3コースを設置した。
- 博士課程では、「アジア非感染性疾患（NCD）超克プロジェクト」、「がん専門医療人養成コース」、「医・工・デザイン連携グローバルアントレプレナー育成プログラム（iKODEプログラム）」といった文部科学省の事業に採択された特徴的なプログラムを設けている。
- 博士課程、修士課程ともに、医師、看護師等の医療従事者等のニーズに応じて、入学定員に対して75%以上と、継続的に社会人入学者を多く受け入れている（P2-4、資料2-2）。

(2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

- 修了者の就職率は、平成22～27年度の平均で、博士課程95.7%、修士課程81.1%と高い値となっている（P2-9、資料2-6）。
- 博士課程の論文のほとんどが、国際学術雑誌に掲載されており、そのうち6編は際立って評価が高い学術雑誌に掲載される等、学術的影響力を持つ研究成果となり、また、3編は新聞等で報道されるなど社会的に注目される研究成果を挙げている。
- 就職先へのアンケートでも、医学（看護学）等の「知識」、医学（看護学）的手技といった「技能」、協調性、責任感等といった「態度」に関する各評価に対して、「あてはまる」、「ややあてはまる」と回答している割合の平均は、ほぼ80%を超え（P2-9、資料2-7）、病院長や施設長へのアンケートでは、特に「患者に対する態度の評価」については90%を超えている。